

ティークの「アブダラー」におけるオリエントの魔術師

岩本, 真理子

<https://doi.org/10.15017/2332556>

出版情報 : 文學研究. 91, pp.73-86, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ティークの『アブダラー』における オリエントの魔術師

Der orientalische Zauberer in Tiecks „Abdallah“

岩 本 真 理 子

ティーク (Ludwig Tieck 1773-1853) が19才の時に書いた小説『アブダラー』 (Abdallah 1792) は一風変わった作品である。この小説は「ティークの『群盗』¹⁾」という仇名を持つことから明らかなように、シラー (Friedrich Schiller 1759-1805) の情熱的な悲劇『群盗』 (Die Räuber 1781) の影響を受けているといわれる。確かに、主人公アブダラーの言動には、『群盗』の主人公カール・モールの示す、絶望に駆られた人間のすてばちな言動を思い起こさせるところが多い。しかし、カール・モールの絶望は、放蕩の挙句に、腹黒い弟フランツの計略によって、父親から見放されたと思ひ込んだことから生じるが、それでも彼には婚約者アマーリアの愛があり、また、義賊としての正義感がある。結末部分で、追い詰められたフランツが自殺する場面や、貧乏人に賞金を与えるためにカールが自首を決意する場面などは、やはり確固たる正義感に裏打ちされている。一方、ティークの描くアブダラーの絶望は、善悪の価値観の崩壊であり、アイデンティティーの破壊であり、その結末にも主人公の無残な死があるのみで、正義感どころか、悪の勝利と、純真だが無力な人間の敗北があるに過ぎない。このような恐怖と悪に満ちた小説を書いたことについて、ティーク自身『アブダラー』の序文において、「不思議なものを好む傾向は、人間の心に大層深く根ざしているので、偉大な詩人が我々のファンタジーのあの恐ろしい領域に棲む存在を我々に示したときに与える印象は、啓蒙主義や自由思想でさえも弱めることができない。マクベスやハムレットを読む際に感じるあの恐

怖は、決して理性の形成にとって不利な影響を与えるものではないと私は確信している²⁾と述べている。それにしても、この小説の無残な結末は、若いティークの抱いていた虚無感を窺わせて、どこかうすら寒いような読後感を与える。

上述のとおり、『アブダラー』は悪の勝利を描く小説である。善良な若者が愛する女性を手に入れるために友人と父を殺し、自ら悪人と自覚している王からまで卑劣な裏切り者として軽蔑され、破滅して行く過程を、そして彼の師であるはずの賢者オマルが彼をそのような悪事に巧みに誘いこむ過程を描いたものである。

この小説は実は二つの物語が絡み合った構造になっている。すなわち、アブダラーを主人公とする、善から悪への転落の物語と、オマルを主人公とする魔術的賢者の修行の物語とが組み合わせられているのである。表面的な筋書きの背後で悪の力による策略が巡らされているため、複雑な展開となっているが、以下に二つの物語の粗筋をまとめてみよう。

物語は、「タルタライのある地域にアリという悪逆無道なスルタンがいた」と始まる。この国にセリムという尊敬すべき老人がおり、アブダラーはその一人息子である。セリムはかつてアリに財産没収の上追放されたことがあり、妻をも失って絶望の極にあったとき、かねて顔見知りの修行僧オマルに出逢い、彼の不思議な力によって宝を与えられ、その後名前を変えてひっそりと暮らしていた。数年後、再びオマルが病み衰えた乞食となって現われたので、セリムは恩返しのために、彼を息子アブダラーの家庭教師として家に住ませる。また、セリムは息子に、親友アブ・ベケルの娘との結婚を命じ、さもなければお前を呪うぞ、という。この呪いが結局はセリムの命取りとなるのである。父やオマルのそのような過去を知らないアブダラーは、ある時宮殿でアリの娘ツルマを見て恋に落ちる。一方セリムは、アブ・ベケルと共に、アリに対する反乱を起こすが、密告者が出て失敗、セリムはアブダラーと共に逃げる。アリは、セリムを捕えたものに娘ツルマを褒美として与える旨告示する。それを知った

アブダラーは苦悩するが、ツルマに対するアブダラーの愛を知らない父はあくまでアブ・ベケルの娘との結婚を迫り、それを退ける息子に呪いの言葉を吐く。愛する父から呪われて衝撃を受けたアブダラーは父を憎み始める。彼は自分と同じくツルマを愛していた友人ラシードを殺した後、遂に父を密告し、父は捕えられて処刑される。約束通りアブダラーはツルマを得るが、父に対する裏切りゆえに、暴君アリも、ツルマも彼を軽蔑する。そして婚礼の夜にアブダラーは父の死体の幻を見て狂乱状態となって死ぬ。このアブダラーの悲劇が小説全体の表面を支える骨組みとなっている。

そしてこのアブダラーの物語の背後にあるのが、オマルの物語である。これは、オマルと同様に魔術的賢者であるナディルという人物が、アブダラーを救うために彼に告げたものである。

この世のすべてを知りたいという知識欲に駆られ、人間を超えた存在になることを願うオマルとナディルは共にアハメドという賢者の弟子となり、人知を超えた能力を身に付ける。しかしなおも知識欲を満足させることのできなかったオマルは、モンダールという魔物の許を訪れ、さらに超人的な力を得て、人間を軽蔑し、悪の力を振う。しかし孤独感にさいなまれていた時期に、暴君に追放されて悲しむセリムに偶然出逢って同情し、宝を与えたために、モンダールにとがめられ、責め苦を受ける。モンダールは、責め苦からの解放の条件として、誰かある人間が狂気に陥ることなく父親を殺すように仕向けるならば、お前を自由にしようという。そこでオマルは再びセリム親子に近づき、アブダラーの教育を任せられ、セリム親子の完全な信頼を得る。そしてツルマに恋をしたアブダラーに未来を見せてやろうといい、父を殺すことによってお前はツルマと結ばれるのだと予言する。このようにして、ツルマへの愛を父に打ち明けられないアブダラーが、父の呪いに劫を煮やして父を殺すように仕向け、最後に魔物のような正体を表して、モンダールよ、私は自由だ、と叫んで消える。

『アブダラー』に用いられたモチーフ

この小説は当時流行していた大衆文学の様々な要素を備えている。

第一に秘密結社小説。これは、人間が自分の意志とは裏腹に、影で策謀を巡らす秘密結社の力によって、悪事あるいは思いがけない事件に巻き込まれることとなる、というものである。シラーの『見霊者』(Der Geisterseher 1787-89)がその一例である。

しかし影の黒幕が秘密結社ではなく、悪魔ないし悪魔的な人間の魔力の場合もある。その代表例としてシュピース (Christian Heinrich Spieß) の『侏儒ペーター』(Das Petermännchen. Eine Geistergeschichte aus dem 13. Jahrh. 1791-92)がある。『アブダラー』とほぼ同時期に書かれ、共通点を多く持つこの幽霊物語は当時大変な人気であったという。

第二にオリент——これは中近東、インド、中国、果ては日本までも含む、広く曖昧な概念である——を舞台とし、ほとんどお伽話風の異国情緒を利用するもの。これはドイツよりもフランス、イギリスで先に発展した。そのきっかけとなったのは、フランスのアントワーヌ・ガラン (Antoine Galland 1646-1715) による『千夜一夜物語』(Les mille et une nuits 1704-17)の翻訳である。これは現在知られている『千夜一夜物語』のおよそ四分の一にしかあたらないものであるが、有名な『アラジンと魔法のランプ』や『アリ・ババと四十人の盗賊』、『シンドバッドの物語』を含み、その後のヨーロッパ各国の文学に測り知れない影響を与えた。したがってオリントを舞台としていること自体は十八世紀末のヨーロッパではさほど珍しいことではなかった。事実ティークが『アブダラー』を書く際の手本としたのは、イギリスのベックフォード (William Beckford 1760-1844) の奇想天外なアラビア風小説『ヴァテック』(Vathek 1786) であると言われる。そして、オリント物が珍しくなかったとはいえ、単に異国情緒を醸し出す小道具としてオリエンタリズムを狙っただけのものや、誤解、偏見によるオリント像を含むものも多い中では、『ヴァ

テック』と『アブダラー』はユニークな存在である。

アブダラーの手本たる『ヴァテック』は、ベックフォードがオリエントに関して並々ならぬ知識を持っていたことを示している。主人公として、『千夜一夜物語』で有名なカリフ、ハールーン・アル・ラシードの孫を選んだことがすでに彼の知識の正確さを証明している。というのは、ヴァテック（ワーシク）は実在の人物ではあるが、在位年数が短いため、現在の歴史書でもその治世に関する記述はきわめて少ないという、謎に包まれた人物であるからだ。したがってこのような幻想的な物語の主人公として最適なのである。しかも彼の異母弟にして次の代のカリフ、ムタワッキルは建築マニアで、『ヴァテック』に描かれる一万一千段の階段を持つ塔を思わせる巨大な建築物をこの物語の舞台となった都市サーマッラーに建てさせている。そのほかにも、ほとんど荒唐無稽とさえ言えるこの幻想的な物語の中に、意外なまでに多くの歴史的事実やオリエントについての正確な知識が巧みに利用されている。

『アブダラー』には、ベックフォードの『ヴァテック』とは異なり、オリエントに関する具体的な知識の利用は全くないといってよい。舞台となった国の名さえはつきりせず、登場人物の名前も当時のオリエント物や『千夜一夜物語』から無造作に採ったものばかりである。その代わりに、『千夜一夜物語』から直接借用したと見られるモチーフが巧く利用されていることが確認できる。

オマルという人物像のもっとも基本的なモデルは恐らく、『アラジン』に登場するマグリブ人の魔法使いであろう。しかし、ティークの創りだしたオマルは、はるかに複雑な性格を有している。この小説の真の主人公はオマルであるとも言えるのだ。ほかに『アラジン』からそのアイディアを採ったと思われるのは、アブダラーがオマルの進言によって、未来を知るために地下世界に赴き、そこで父親殺しの予言を受ける個所である。さらにアブダラーはナディルによっても地下世界に行かされ、そこでオマルの正体を知らされる。この二度にわたる地下世界行きは、アラジンがマグリブ人に欺かれて地下の宝庫に行き、宝石と魔法のランプを持ってくる場面から思いついたものであろう。また、アラジ

ンはマグリブ人から魔力を持った指輪を与えられ、そのお陰で命拾いをするが、アブダラーもオマルから魔法の指輪を与えられ、この指輪は、アブダラーをオマルの手中にとどめておく役割を果たしている。

オマルとナディルが魔術により姿を変えて争う場面は、『三人の托鉢僧または王子と五人のバグダッドの女の物語』の中の『第二の托鉢僧の話』に現われる王女と魔神の戦いの場面を利用したものである。

『アリ・ババと四十人の盗賊』では、アリ・ババに宝物を奪われ、手下たちを殺された盗賊の首領が、復讐のために商人に身をやつし、アリ・ババの息子に近づき、その父の信頼をも得るが、これはセリムの命を狙うオマルがセリム親子に近づき、絶大なる信頼を得るのと同じ図式である。ちなみに、アリ・ババ親子を盗賊の策略から守ったのはマルジャーナーという女奴隷であるが、彼女は常にアブドゥッラーという奴隷の協力を得ている。

しかし、『アブダラー』と『千夜一夜物語』のモチーフの共通点をこれ以上列挙することは差し控えたい。ここで考察したいのは、この小説の本当のテーマ、すなわち、飽くことを知らない知識欲を満足させるために人間性を失っていく過程の様々な段階、そして人間を超越したという意識から生じるニヒリズムに侵される人間たちの姿である。特に注目すべきなのは、この小説の真の主役オマルという人物像の特異性である。

知識欲と人間性の喪失

オマルは一言で言えば、魔術的賢者である。ティークはこのような特殊な人物像を徹底的に描きたかったために、わざわざ舞台をオリエントにしたのかもしれない。しかも、オマルは本質的にはオリエント的ではなく、あくまでヨーロッパ人の価値観によって作り出された魔術師なのである。すなわち、オマルとは、オリエント世界の賢者（または魔法使い、予言者、仙人など）とヨーロッパのファウストの人物像の混合体なのである。オマルの正体が詳しく語られる

のは、第二部でアブダラーを破滅から守ろうとするもう一人の魔術的賢者ナディルがアブダラーに手渡した手紙においてである。ナディルもオマルも、若年より「すべてを知りたいという知識欲」に捉えられて、カフカスにすむ賢者アハメドの許に弟子入りする。二人は、人知を超えた力を善にのみ使うという誓いを立てたうえで、アハメドの力を受け継ぐ。その時以来ナディルは、人間としての分を越えたことを後悔し、人間の限界に留まっていた時代に戻りたいとさえ思いながら、師アハメドの許に留まり、「自然と神の叡知を観照する」隠者の生活を送る。一方オマルは、ますます募り行く知識欲にさいなまれる。その時の苦悩をオマルは以下のように語る。

わしにしてみれば、叡知が人間のもっとも尊い、唯一の目的だった。(中略)あらゆる徳に対する疑惑の念から、わしは徳という称賛されるべき神性を軽蔑するようになった。³⁾

こうして苦悩するうちに彼は魔性の賢者モンダールの噂を聞く。モンダールは実は人間ではなく、「彼自身が彼の呪いであり」、「その名前は恐怖に至る合言葉である」という魔物である。モンダールの許に赴くことは人間性を失うことを意味する。

わしは歩を進め、わしの人間らしさをここに置き去りにした。わしは有限の世界に属するものをすべて我が身から投げ捨てた。そしてわしをこの世にとどめていた絆を永遠に引き裂いたのだ。⁴⁾

オマルの知識欲とはどのようなものであろうか。それは漠然としか表現されていないが、人知を超越すること、この世のすべてを認識すること、神のような永遠の存在となることである。モンダールのすむ荒涼とした山へ登りながら、最後の迷いを振り捨てようとしてオマルは自分にこう言い聞かせる。

しかしわしはこの世で何をすればいいのだ？ 天使になることはできないし、人間でありたくはない。満足を知らない者には地獄しか残っていないのだ。ほかにどうすることもできぬ。わしは人間らしきの何ものも、後戻りして取り戻そうとは思わぬ⁵⁾。

そして遂にモンドールに出逢ったオマルは「わしは人間であることを恥じているのだ、お前の仲間にしてくれ。お前を理解でき、お前と似たものになれるように」と懇願する。モンドールはオマルの野望を聞き、「思い上がった奴め」と嘲笑するが、「お前に与えられるものは与えてやろう」といい、また、「おれは人間の上にあるのではなく、人間と異なる存在なのだ」と語り、悪の象徴としての正体を表す。

人間は神から、すべてのことを秩序付け、一つの完全なものにしようとする衝動を与えられているが、おれの喜びとは破壊なのだ⁶⁾。

「破壊」そのものであるモンドールは、オマルが人間らしさを完全に捨てざることを条件として彼を受け入れる。こうしてオマルは最初の師アハメドとの誓いを破り、悪と破壊をこととする超人的存在となるのである。

オマルは超越性を獲得するために自ら人間性を捨て去り、超人のニヒリズムに到達する。しかし、セリムの苦境に同情するという形で人間性を一時取り戻したために拷問を受け、再び超越性を取り戻すために、自分だけではなく、犠牲者アブダラーの人間性をも失わせる。そのために、純真なアブダラーの心に、まずこの世のはかなさ、人間という存在の空しさを説く。オマルを心から尊敬している若いアブダラーは、「すべてのものは死ぬために生まれて来ているんだね」と相槌を打ちはずすが、それでは人間の存在には何の意味もないのだろうかという疑問も抱き、「何のためにぼくの心の内面には生き生きとした精神が息づいているの」と尋ねる。オマルは答える。

何のためにだって？ おお坊や、大地を掘り起こしてはならん。恐ろしい骸骨が出てくるだろうからな！ そんな秘密がお前の魂には永遠にわからないままにするのだ。⁷⁾

この謎めいた答えによってアブダラーはますます「知りたい」という欲求に駆られるが、その気持ちをオマルは巧みに駆り立てるべく、人間の理解力の限界を説く。

我々の叡知の前には岩の壁があって、いかにしてもそれを打ち破ることはできないのだ。我々はブロンズの丸屋根に閉じ込められていて、本当に存在するものを何も見ることは叶わず、我々が見たと思っているちらちらする姿は、なめらかなブロンズに映っている我々自身の姿に他ならんのだ。
(中略) 我々は自分が捕われ人であることしかわからんのだ。⁸⁾

アブダラーは「どうして創造主は、人間に限界を悟る能力だけを与えて、その限界を打ち破る力を与えなかったのだろう」と不満を述べる。オマルは、人間といえども、他の動物と本質的に何ら違いはなく、動物と同じように、ただその欲望の赴くままに生きるほうが幸せなのだ、人間と動物の違いは、人間自身を不幸にしている「誇り」であり、「思い上がり」であると言う。彼は言葉を続ける。

人間が鼻にかけている叡知とか徳とかいうものは、風が平野に駆り立てる雲の影、妄想を抱く者がよろよろと追い求める雲の影なのだ。⁹⁾

これがオマルの主張の主眼点である。アブダラーは驚き、「徳は影にすぎないの？」と問い返すが、それに対してオマルは、善とか悪とかいう区別は愚か者の偏見に過ぎない、善と呼ばれるものも悪と呼ばれるものも、すべて未知の力

によって支配される世界の一部に過ぎない、と説き、アブダラーの価値観をぐらつかせる。このような問答によって若いアブダラーは、人格形成が不完全な段階で、人間の知力に関する価値観や、善悪の判断力を根底から揺さぶられたために、いともたやすく人間性を見失うのである。

また、この物語に登場する他の人物にも、オマルのような叡知の獲得によるニヒリズムを示すものがある。ナディルは超人的な叡知の重荷に耐えかねて、無知の幸福を懐かしく思いながら、人間性を保ったまま隠者の立場を選ぶ。

暴君アリもまた、人間性を失いかけた人物であるが、彼がアブダラーの父親殺しの罪を知った際の反応は、ティークの人間不信を窺わせていて興味深い。アリはもともと寛大な君主になろうとしていたのだが、オマルの奸智により、人間を疑い、軽蔑し、己の欲望のままにふるまう暴君へと変身していた人物である。彼はアブダラーと同じく、オマルの洗脳のもう一人の犠牲者なのだ。彼は自分が悪人であることを自覚しているのだが、その彼もアブダラーの密告には衝撃を受ける。正義の人セリムの息子が父を密告するという異常事態は、アリが人間に対して抱いている不信、軽蔑をますます確固たるものにするものでしかない。自責の念に半狂乱となったアブダラーを前にして、彼は大臣メフメドに声をかける。

見よ、メフメド、と彼はにがにがしく微笑んでいった。この虫けらめの無力はわしを楽しませるわ。かやつは自分自身から逃れようとしているが、かやつの意識は自分の裏切りにどうしようもないほどしっかりとつなぎ留められておるのだ。見よ、これが永遠なるものの似姿である人間なのだ。

(中略) わしは人間となったことが悔やまれるわ。わしは自分自身を恥じるぞ。¹⁰⁾

人間性とは何か。それは善悪の判断力とも言えるし、人間社会の中での、愛や徳による人格の安定とも言える。ここで大変興味深いのは、ティークの描い

た「知への欲求」が善悪を超越し、世界の盲目性を認識し、「人間」であることの限界に絶望するという方向を取っていることである。なぜ「知」の獲得が絶望や悪につながり、破滅をもたらすのであろうか。ここではオリエント世界からおぼろげに伝えられた賢者の像と、ファウスト伝説と『ヴァテック』を先駆とする悪の賢者、知識欲によって滅びる悪人などのイメージが重ね合わされている。

『ヴァテック』においても、「退屈しのぎにおびたしい研究を重ねて」いた主人公の「ついにはこの世のすべてを知り尽くそうとし、この世にはない学問までもきわめようと」する知識欲は傲慢さの証拠として描写され、その飽くことを知らない渴望ゆえに主人公がたどる悪と最終的な滅亡への道を暗示している。

はじめて塔の一万一千段の上に登って眼下を俯瞰したときには、王の得意は絶頂に達しました。（中略）ヴァテックはわれとわが身を崇拜せんばかりでありましたが、そのとき目を上げると、星は大地に立って見るのと同じほど、頭上のはるかかなたに輝いているではありませんか。しかし、自らの卑小さを洗々みとめながらも、人の目にはこの身はさぞや偉大に映るだろうと考えて自分を慰めました。そればかりか、自分の心の光は目で見える領界をはるかに越え、星を見て運命を明かすことができるのだとうぬぼれたのです。¹¹⁾（私市保彦訳）

ティークがオマルの人物像を形成する際に、オリエント世界の魔術師や仙人についての何らかの知識を用いたかどうかは定かではないが、ベックフォードが描いたこのヴァテックという人物像をヒントにしたことは確かである。ヴァテックという人物像によって表されるのは、知識欲－人間的感情の無視－人間に対する軽蔑－悪という図式である。もともとのヒントはオリエントについての情報にあったかも知れないが、その発想はあくまでヨーロッパ的、言い換えるな

らばファウスト的である。しかしここには不思議な符合が見られる。

オリエント世界の物語では、しばしば魔術の成功のための試練が物語の主人公に課される。そしてその試練においてもっとも大切なことは、人間的な感情、特に愛を抹殺することである。ガランの『千夜一夜物語』には入っていないが、『アラジン』と同系統の話で『商人ウマルと三人の息子、サーリムとサーリムとジャウダル』という物語がある。この中に、魔術師が主人公ジャウダルに地下世界での試練を課す場面がある。この試練の間に目にするものはすべて幻なのだから心せよ、という魔術師の忠告にも拘わらず、ジャウダルは母の幻への愛に負けたため、一度は試練に失敗する。そしてようやく二度目に、愛を振り捨てたお陰で成功して、富と魔力による援助を得る。¹²⁾

また、日本でも芥川龍之介の翻案でよく知られている杜子春の物語をこの点で思い浮かべる人も多かろう。唐朝の志怪小説『続玄怪録』に含まれる『杜子春の物語』でも、仙人から「すべては幻なのだ」と忠告されていたにもかかわらず、杜子春は、幻の中での我が児への愛情に負けて一言声を立てたために、仙術は破れている。どちらの場合も魔術師が「お前が見るものはすべて幻に過ぎないのだから心を動かされるな」と注意していることは大変興味深い。¹³⁾ アブダラーの二度目の地下世界行に先だって、賢者ナディルが同様の忠告を与えているのである。

オリエントでは、魔術的試練における人間的感情の抑制は、決して悪へとつながるものではない。むしろ感情は、魔術的修行の妨げとなる邪念、煩惱である。愛でさえもその例外ではない、それどころか、愛は魔術にとってもっとも手ごわい障害である。オマルの場合も、一度超人的能力を得て破壊、悪をこととしながら、ついセリムに対して同情心を示したために罰され、再び魔力を完全なものにするためには、この同情を取り消し、セリムを破滅させねばならなかった。ここでも、愛に代表される人間的感情の克服ないし放棄が、魔力を完成させる道なのである。また、オマルのニヒリズムも、超人的認識力を得たことによって、この世のことはすべて幻に過ぎないと悟るところから発している。

ただそれが、オリエントにおけるように善悪を超越した悟りの境地に到達する道ではなく、悪へ、破滅へとつながる道として描かれているところがティークの特徴、いや、むしろヨーロッパの特徴である。ヨーロッパでは、超人的叡知の獲得は、悪魔との契約によってなされるという考え方が伝統的であった。フェウスト伝説がこの点でもっとも有名ではあるが、紀元1000年頃在位した法王シルヴェストル2世に関する、同様の伝説がかなり広く後世まで流布していたというから、この思想はかなり根の深いものである。法王としての手腕も優れ、学識も高かったシルヴェストル2世は、イスラム教徒から学問を学び、悪魔と契約して、そのお陰で法王の座を得たのだと言われていたという。どうやら、彼の人並みはずれた叡知と、彼が学んだ修道院がイスラム文化圏と隣接していたことから生じた伝説らしいが、ここにも、異教の高度な文化に対するヨーロッパ人の憧憬と恐れが現われているようだ¹⁴⁾。

この小説では、唯一正義の人としての高潔さを最後まで保つ人物セリムさえもが、実は息子に呪いをかけたことによって彼を追い込む役割を担っている。セリムが死に臨んで息子の罪を許したことでさえ、息子にとっては罪の重さを増すものでしかない。また、悪の象徴オマルとモンダールは全く罰されず、人間を超越した魔神であり続ける。純真だったアブダラーは、父を密告して死なせる直前に友人ラシードを殺し、一瞬快感さえ覚える。それほどのことをして手に入れたツルマからは恐れ憎まれ、悪人であるはずのスルタン・アリからまで徹底的に軽蔑される。どこに正義があるのだろうか。この小説はただひたすら、人間が悪人の策略や運命によってどこまで悪に染まれるか、善人ですらどこまで悪をなしうるか、どこまで転落しうるかを描いているとしか思えない。そしてその背後には、超人的能力を再度手に入れようと画策する魔術師の姿がある。もちろん結末の悲惨さはティークの想像力によるものであり、オリエントの魔術師など登場させなくとも、彼が人間の悪心に目を向ける傾向を持っていたことは、『ブロンドのエックベルト』(Der blonde Eckbert 1797) が雄弁に物語っている。だが、オマルという人物像が、オリエントとヨーロッパで

の「知」の追求に対する態度の相違を、はからずも示した一例であるのも確かである。

使用テキスト及び参考文献

- Ludwig Tieck Schriften in zwölf Bänden. Bd. 1. Hrsg. von. Achim Hölder.
Deutsche Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1991 (LT)
- Vathek (in: Three gothic novels) Penguin books 1968
- 『ヴァテック』上・下 ウィリアム・ベックフォード 私市保彦訳 国書刊行会 1990年
- 『アラビアン・ナイト別巻 — アラジンとアリババ』前嶋信次訳 平凡社東洋文庫
1985年
- 『アラビアン・ナイト』第13巻 池田修訳 平凡社東洋文庫 1985年
- 『続玄怪録』李復言：前野直彬編訳 『六朝・唐・宋小説選』平凡社中国古典文学大
系24 1978年
- 週刊朝日百科『世界の歴史』第38分冊子 朝日新聞社 1989年
- Friedrich Schiller Werke und Briefe in zwölf Bänden. Bd. 2. Hrsg. von Gerhard
Kluge. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1988

注

- 1) LT Bd.1, S. 988
- 2) ebd., S. 255
- 3) ebd., S. 335
- 4) ebd., S. 336
- 5) ebd., S. 338
- 6) ebd., S. 338
- 7) ebd., S. 262
- 8) ebd., S. 262
- 9) ebd., S. 264
- 10) ebd., S. 421
- 11) Vathek. S. 154 なお、訳文は私市保彦訳を借用した。
- 12) 『アラビアン・ナイト』第13巻 122頁以降参照
- 13) 『続玄怪録』314頁参照
- 14) 『世界の歴史』第38分冊子 C-252頁参照